

佐賀市 13 歴史探訪

さがじょうてんしゅだい きそこうぞう 佐賀城天守台の基礎構造

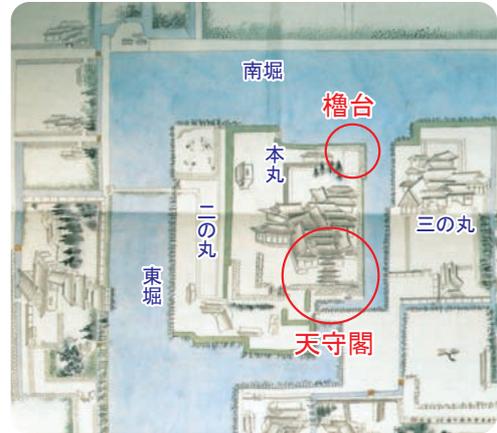
佐賀城は鍋島直茂・勝茂親子により、龍造寺氏の村中城をベースにして拡張・整備されたもので、慶長16年(1611)に完成したものです。天守閣もその時に建築され、5階建てのものでした。天守閣が詳細に描かれている図は残っていませんが、慶長年間後半(1609～1614)に作成された「佐賀小城内絵図」には簡略化されたタッチで描かれているものがあります。この天守閣は享保11年(1726)の佐賀城の大火で焼失し、その後天守閣は江戸時代を通じて再建されませんでした。

もともと、天守閣というのは、^{やぐら}櫓(または矢倉)が発展したもので、本来の目的は遠方や周囲を展望するための施設で、武器庫でもありました。それが、城郭の要衝に防備施設として発展し、天守閣となりました。この天守閣の土台である天守台の構造はどのようなものだったのでしょうか。

佐賀城の天守台の地下構造は、発掘調査がなされていないので、詳細は分かりませんが、佐賀城天守台の南方約100mにあった、櫓台の発掘調査結果が参考になると思います。

佐賀城本丸の櫓台は、約5～6mの高さであったと考えられますが、明治以降に壊され、平坦になっていました。発掘調査では4～5段の石垣が地表下に残存し、その上面で南北幅約13m、東西幅約16mの規模であることが分かりました。石垣の内側には径10～20cmの石を幅約2mの範囲でぎっしり敷き詰めていて、石垣内部を補強する工夫がなされています。この石垣の下はまだ調査を行っていませんが、城堀護岸下部調査や文献から判断すると、地盤沈下を防ぐために石垣の下に多数の松材が敷かれているものと考えられます。おそらく天守台の地下構造も本丸の櫓台の構造に準じているものと考えて良いものと思われます。

地盤が軟弱な佐賀平野で、天守台は完成から約400年たった今でもほぼ当時に近い姿を残しており、先人の土木技術がいかに高度であったかが分かります。



▲佐賀小城内絵図(部分)



▲佐賀城天守台(平成13年頃の様子)
(頂部の建物は明治建築の協和館 北東部から撮影)



▲本丸南西隅にあった櫓台の調査状況

一口メモ

本丸南西隅にあった「櫓台」は藩政期の各種絵図にはっきり描かれています。しかし、櫓が描かれている絵図はありません。発掘調査により櫓台の石組みが発見されたので、「櫓台」の存在自体は史実であることが分かりましたが、現段階では櫓の存在は証明できない状態です。櫓が描かれた絵図が発見されればいいですね。